

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



3022
8



三國一夜物語卷之七下

東都 曲亭馬琴著編



第十編

富士太郎孤島の仇を殲く事

斯て富士太郎へ櫻子を扶掖き櫻子へ叔太郎と云き抱き鳩曾
巔を南へ走りて馬場の里を過りて伊津の濱を来りて
忽地寄手の大勢の行ゆり。頃しも夕月影も入るこの天
結陰て暗けどるり照を寄手の蕉火へ見星の異るる
室積平馬肚甲まで真先の馬をまきませ。やとて富士太郎
是家を喪ふ狗も今又網の裡の奥とるり縦翅の
天の翔鱗のりて水と潜るとも脱出する路もなしとくく項を



浅間が黒水戦重太郎と射る

富士太郎の一步もあらずを
 右に受け左にさぐり刀尖より
 火花を出して七命を限りぬ戦ひ
 仇人照行ゆへにさぐりあつて
 妻子も怒め絆とされぬ且戦ひ
 且つらつて稲富の郷まを來つ
 と薄疾あまの負ひしを
 今いそぎまをぞと思ひしを見
 道のやうなる柴の門の
 裡の木魚の音聞ゆるあを



さし伸て刀を受よを呼び無言
 士太郎大に怒りこそ絶て汝
 用かゝとやく退きて浅間を出せ
 汝等よするま助太刀せんそ可
 惜命を失ひせと罵りて刀の
 鞘を捨ゆち白眼つらてを立ら
 ける平馬聞てうち腹をさこの
 愚者舌長しあは打首よを下
 知ままばうけぬつると回答も
 あぞもる抜つて走りくろを

櫻子が抱きさる。敵太郎せうひとて。技折戸ひききめぬ。
 走り入り。とまひ父の仇を報へんとするものなるが。許り助太
 刀の黨のとり圍きて。終めらるるを遂ぎ。只今討死のこ
 まふおよびて。稚きもの。みの。流石のころぐ。いふの。あはま
 養ひとて。弟子とも。見ト。なる。と。い。記り。竹塚の
 上の敵太郎せうきさる。あまひ外面の走り出ま。大勢
 雲の起るがごとく。透間もさ。追来まり。今ハ心やき。と。血
 刀うちあつて。蒐ひふを。櫻子ハ忙しく引とぬ。と。物ハ狂ひあふ。
 當の敵もあつぬ。平馬がともがらと戦ひて。死きとも。孰く
 登らん。脱る。わづら。脱る。とも。恥み似て。恥みぬ。命全して

時。待角。本望。と。げ。ぬ。と。の。な。ま。ま。で。い。と。より。腰。を。押。て。浦。曲。の。う。え
 誘引ハ富士太郎もゆる。逢小其所を落延て。黒崎の江岩へあつ。時
 昔。敵。撃。船。の。る。れ。その。ま。に。あり。な。ま。バ。夫。婦。内。つ。と。花。葉。つ。と。を。纏。を
 切。ら。ひ。渺。々。る。海。上。浪。の。ま。ゆ。く。漕。出。す。時。室。津。の。う。え。當。つ。と。
 螺貝の音高く。波え十艘のまりの快船忽然と。漕来。う。富士。小。船。を
 中。より。圍。矢。を。射。ら。る。雨。の。こ。と。先。先。る。船。ら。杖。衝。く。浅。間。照。行。立
 め。つ。ま。の。の。富。士。太。郎。謀。者。の。告。ご。り。て。い。ま。よ。く。あ。ら。送。恨。ハ。牛。角。を
 母の仇前ツ受。を。修。り。て。よ。引。放。ば。あ。や。ま。富。士。太。郎。へ。い。と。と
 立。を。擦。棄。く。大。怒。の。再。怯。る。浅。間。左。衛。門。長。勢。と。相。語。の。ま。ら。子。飛
 道具。を。り。て。撃。ん。と。す。き。金。石。等。一。死。富。士。太。郎。が。衣。の。裏。も。あ。く。と

ちりくあせとを叫びつた。右の板子を抱き、指さるゝ。右は、蛇を
 把て、猶も各をさする。折るも四方より射くる。箭前、様子も臂を傷らる。
 夫婦、数々所の廣を被る。進退自由。さらば、富士太郎、嗟嘆して
 夫ハ夫婦ガ死す。三日なり、懇仇人ハ射す。めら且死差を曝し。これ
 海底ハ水層とありて、怨を泉下ニ報ふべし。己まんくどひも、父ハ
 海底ハ水層とありて、怨を泉下ニ報ふべし。己まんくどひも、父ハ
 多のろを携て共ニ水中ニ跳入る。怪しむべし。夫婦の、めハ水
 底へ沈も。からず。くまも、浅く、りし。ハ巖の端。るる。疑ハ惑ハ
 ぬつら。岸に波上と走る。と流る。より、る。速く。首と回して、被所を
 見。ハ照行。む。采る。松。ハ間も遠く。あり。ま。さ。り。蕉。ハ。の。光。も。う。ん。す。る。に
 今。見。ば。ま。ろ。く。奇。異。の。思。ひ。さ。り。一。命。を。天。に。任。せ。て。動。も。せ。ら。ね。ど。一。瞬

の中。の。ゆ。き。な。と。里。と。走。り。ん。そ。の。夜。も。既。明。ゆ。こ。ろ。一。の。島。は。着。く。く。バ。
 ま。ら。夫。婦。を。載。せ。く。来。つ。る。の。と。う。な。ふ。甲。の。長。さ。四。五。尺。も。あ。ら。し。ま。わ。り。を
 亀。も。と。の。り。ろ。富。士。太。郎。と。い。ふ。と。世。を。丁。拍。と。い。ふ。と。思。ひ。出。せ。る
 更。ゆ。り。父。駿。河。に。在。せ。日。三。徳。の。浦。あ。海。士。の。子。が。う。ち。殺。せ。ん。と。す。る
 亀。を。救。ひ。て。放。得。さ。ず。の。り。と。波。つ。つ。が。こ。の。吾。侪。が。危。難。を。救。ひ。負。て。来
 ま。る。の。亀。ハ。命。の。恩。を。報。せ。る。の。ゆ。え。に。さ。ら。に。あ。り。ゆ。り。て。唐。土。の。毛。宝
 日。邦。の。如。無。僧。都。と。是。龜。を。放。さ。し。て。龜。又。負。て。其。の。死。を。救。ふ。龜。を
 見。し。て。あ。ら。ん。の。と。う。ま。入。回。の。省。て。父。の。仇。人。に。後。と。う。を。新。島。守。に。か。る。と
 能。ハ。い。ひ。が。ひ。き。を。悔。う。ら。ば。様。子。も。其。の。理。の。い。ひ。恩。へ。は。言。葉。も。な
 ち。り。涙。う。ら。れ。ま。い。つ。夫。婦。汀。渚。に。跣。上。ま。ら。龜。ハ。海。底。を。沈。ま。り。さ。る。程

小夫孫ののハ矢傷と忍びて入住び里やあつと索まじき。こゝろ一箇の
浦へも逢が空へ入らばらの燃上つて磯へ潮風吹ゆまゝ行客路人の
逆もくす樵歌牧笛の音もせず白波ひまゝく魂とひまゝく青巖
ひづらつ腸を断ちりるる山に硫黄のゆりて泉はる湯と
りて流るまば夫孫とを掬く咽喉を潤く心へ侵して痰口を洗く
痛頓に滅くこゝろ清々まゝるりぬこの日海上より暗て千里の外も見え
こゝろ洗く海面とそとそ定す眺る小烟霞くまゝ五ツの傍七ツの
傍もくえく富士太郎妻と對ひて薩大浮く五嶋七嶋とて十二の
島のりまゝとを鬼鬼といひひく鬼の栖くくや今ハ硫黄のまを
とて硫黄が島と名づく彼彼寛成經泰頼の流るまゝのひくも十二島

の中ハ七千度白石硫黄が島あり。件の島どもを去と數十里あり。
一ツの無人島ありとあり。彼所の浮島が五島七島ありとあり。
無人の島ありとあり。あつて糧ぶらふ磯あり。十日といふ活ぐま
元より歸るとまゝもく魂空くくわくまゝて屍を沖津島山の鬼
とやまんとく口説く櫻子もいよく心むげめて思ひつゝるらる
子のり見る悲しき夫のり活るうひる身せうとてまじきも辨
金磯辺ちちく立とまゝ浪の打むげと見え乾く魚の三ツ五ツ。
砂のまじりてゆりて夫婦抱ひて拾ひと山より出る火の集りてを食
て飢をまのぎ。夜へ虽が根を枕とて存命く一日富士太郎が
やう。つゝくおしへ往る年。又田の神灵的詫宣の死ん。飲ハ生を告ぐの

違ひて夫婦が死んじまで命ひらるるの今既に三つびつらへんバ使きたよ
 ちもあらず、只願生ん思へばと心憂ものるを共命ハたりのよ
 ちてとの病に朽果んそくく思ひこえ奥と拵ひく糧と一つ寓然
 早七日を送るに矢瘵も程多く愈へく只あけくまのなすきびく
 法を試みどど七百日のまのそをへく髪ハ蓬を載て肢体衰へ顔黒
 三夜の裙ハうたへて海松のごくくうのねほど志遂へ移らへく
 ありるまをこそも播州へ入室積平馬松軍兵を起し海陸をり馬
 甘へるを主君美則さく憤り多ひ平馬ハさるり五人の属官ホと
 召捕へ履へく獄舎へ繋せ浅間照行を搦捉せんと志のひく照行
 才よく使考を大く怕まその夜の中に逐電して播摩と摂津の封疆を



下畑の東在家の深く隠れし赤松の家臣も終つたれを
 浅間を搦捉りて後平馬が黨をも刑罰ありて年暮行
 そのまゝ置きし次の年の二月下旬風雨烈し夜紛と平馬
 五人の属官を相語て獄屋を破りしるとも脱出津国走
 翌朝塩屋の浦めて照行ゆきありさる便船して淡路へ
 夫より肥後下りて菊地を過り奉公せざるごとくひつ
 艘の船を備て七人と乗移り淡路を投て船を折し海風忽地吹
 荒て大洋の漂ふ三日たりしと處を尋るへき富士太郎夫婦
 無人島の漂着せり時二人の舵人と一人の属官の船中
 ぬて死し照行平馬が徒まで六人となりし島の上るを

て船の巖に打當らば微塵も砕くやせしる是より先富士太郎夫婦
 遙く彼船を去りて大に飲びしりて帰るべき時至りて其方
 在りし船に居りし仇人の船もあらば横子ハ夫々對てし
 此ゆゑあらば浅くかきくちの姿を彼の人人々が怪し
 鬼をいふにあらば怖れて船を寄すべからずや引退てを待
 めとて富士太郎も諾りて二三町後方なる岳蔭の居りし
 只今船よりゆきし人なる仇人照行もその中にありし天地
 拜を後び勇ましくゆく足を踏鳴りて走らぬがごとくや浅間
 浮木の亀を救はせて島の優曇華花の咲く春を今とて
 太郎知りし勝負を交せしと名告りて刀を丁と後照行平馬



大に驚き思ふも返巡せしむ。助太刀す人をも復入
を六人七人易しとびし侮り照行ハるやと。お笑ひ汝ハ黒崎の
弱死せしと思ひし今現つる人ハ死魂とこそわらひて成神
せてんを嘲呼つ平馬こそ注目すれば。刀を拵つておてを
富士ハ去年より島よりていと憔悴しつるより。神肌擁護の力ハ
日來するも勝つと踏とく。挑み戦ひ平馬が細首お落し入す刀
三人の属官ハ深瘡を肩せ給る一人も切ておすその疾工電光の閃く
如く照行ハ花をるを照行丁と受おひ浅間ハ風難の船ハ疲乏富
士ハ孤島の磯ハ衰へるより多死く。お太刀助も定るるに接
子ハ見るゆいせく夜を汗と握つる。已に開戦時とつ。富士が

嘯しお太刀の照行ハ胸より乳の下まで切さげら。お地盤と作るを
豪くりて首掻落せ。接子の扇をく。お太刀助も定るるに接
富士太郎ハ切伏せ。助太刀の三人とも刺殺し。破るに捕と。仇人照
行が首を岳の上へ供お死夫婦合堂を。お父母の告言し。おわらりの
お向せり。歸御の。おちるる。お日應永元年二月廿五日の夏
おてする。お右門が忌日。當て。お仇を報ひ。孝子の績
お有る。おれ。お富士太郎ハ既。お本望と遂る。お照行お果
お八浪。おお嵐。お砕く。お帰る。お思ひ。お
お。お水際。お一ツの大亀。お忽然と。お跣より。お夫婦の。お
お。お其方。おひけり。お是る。お往。お載せ。お末。お亀

見てもまは聊も疑はず夫婦の感涙をぞもつね仇人の首を擧げて彼亀の甲に
 坐せし亀はちび海上を滔々逆巻浪を法で走りて以前より速その
 日の黄昏に播列黒崎の濱に着るまは夫婦は舟を陸上上げ亀を對之
 ちの濱のよるにびとのべ寔は汝ハ尋常の亀はわれら三徳明神住吉四社
 の使者あるにこそぞとて合せし伏せぬが亀もも哀惜しげに遂
 に水底に藏せたるの時富士太郎はも當國の守赤松家の縁由を訴へ
 彼をべとて様子をのぞくも稲富の郷を來りて往く敷太郎を捨
 ちて柴の戸に立ち上りて是は去年の十月許多の仇人より圍を必死を究
 ちの巷へ推見を捨たる夫婦のものゆが久く名もる死島に守らひ不
 思議にも仇を擧て目今帰り着ては其兒の顔をも一目見せぬとて

一れはも惚えやまんぬ音つは進らするものゆひも果さるに五十の近
 尼法師が敷太郎をうた抱き障子押ひらぬと走りて夫婦が異なる姿を
 て大つ驚き鬼入りと疑ひ惑を様子の彼の尼をつくつてせりぬ
 村主兵分が妻の老曾のゆりぬやとていひぬかおんうらうらとてびあ
 給きとて様子のひかふとてませは女の寔を果のひのゆ多
 くとくはあはれとて思ふと誘とてつて伴は夫婦よりちび
 堪ずし一裡に入りまが敷太郎を抱きとりて親子恙なれ再會の鐘愛日
 來といま一つ様子の富士太郎が妻と老曾を語らせせつとて方の兵
 分が首より尾までもらもく速く往らば老曾は且然て泣いて往年
 塚とて姫を奪ひてつて時深痕の負ぬまをるれ也往方を索すわらせ

に夫兵分る索のひずとまじり播磨路を呻吟とこの里人よ抱せられ
 二三箇月うて瘼も愈へる再び紀列へ立ち入りその年の彼は問是の
 索をて空しく暮つたにちつたをまうものく神籤賣トを考ても
 凶多し吉少くあけはばまもとの世ゆてハ姫も夫も見えがてと
 思ひこえ沢の羊那智の山に登つて尼をり法名を信徳と更と四圍
 九列と砂りま行脚して去年の秋播磨へ立ち入るとの所ハ菴を締書字
 山法花山とて詣ると身勢とけりしを奇をまひの和子の哀をて
 城山中狼の舎まりを救ひ鳩宵巔の麓るる家の関を死するも
 審しおがてるに富士夫婦も彼家ハ仇入津間が隠家うと思ふがも索
 由に卯原を一刀に殺してとら子と救ひし妹小雲が夫よりつて死せしむ

高燈籠の暗号に上りて平馬が黨より圍まて一五十一或はくこの或ハ
 うち多し其のあはれ縁と感ゆる老曾の尼いこまら情由を
 てましく終る偶救ひ得し和子と志らざる莫と仇人の毒をた
 擽もくられたれを進ませしこと越度るまは海邊ゆま富士太郎が
 りやう否とあはれむら子尼が彼所へ関をたてまられ仇人の在家を
 加旃夫婦が危難に臨むるにやがて思ひ尼のこころハ三世の奇縁
 現るるまは是併尼が忠心のまらするものありあられその徳を賞せん
 けり今より魯太郎と更く尼が法名とてそのまらに信徳丸と名づる
 すまらちかど名づける信徳丸の別記にまらるる昔人その時接子の菴の
 檀をまら新まら位牌は俗名浪江を記しまら夫と顔うまら人せつ

尼の對してこの故を問ひ信徳尼對しては尼が女兒の侍りこの言は姫もあ
 しめさるるに三つ姫が出生のり。たは尼の乳母の言はるるに三つはあつた
 を人へ預て養育せし。その年の合戦終る際も女児を預り
 たる里親夫婦も長門の府へ移つて住さばせし。はてそのら八風の便り
 十年のまうを待て後さるるのゆゑと告る。は身が女兒は赤間関の長
 が許し賣らるる名を浪江とせし。甲申も團圓を標客へぬ
 年彼里親夫婦も近曾よりぬれぬ。今令嬢をばり復し
 るど叮嚀に物ごとく。せせし。思劇して合戦のり
 なるは兵人も中びの敷く。女児もまう。ひまうけす。の手に至
 て主君の遂に討死あり。姫も落人となり。ゆゑに女児がまうひも

出さるゆゑ。去年の夏尼が四国の序赤間関の長が許し。まう行て
 るる遊女やゆゑを問ひ。その浪江は昨夜入の敷。てのり
 戒名をり出で。毎つた肝つて。愁傷か。名告て。今
 悲も。母の女児。その家を退出け。語る。袖ぞ濡る。
 富士太郎も接子も。胸の哀れ。り。浪江を。兵が女児
 のり。浪江を。浅間照行。を。小寺が。最
 ま。説。信徳尼も耳を側。兵士の浪江。照行は
 ち。過世の悪業。ら。富士太郎。日國守の城
 ありて。復讐の始末を演説。室町殿。免許の御教書と披露。を
 る。赤松美則。對面。縁由。感。照行平馬。生

早しき罪人多り又五人の属官も不忠不美のものぞありてを輔討取ら
 ず其の罪に於て満足せりと然らば俄頃早馬を御使者を泉列塚へ
 遣り大内美弘もこの由を告めしが美弘は前の約を以て許さず
 許さず許さず許さず許さず許さず許さず許さず許さず許さず許さず
 をて向て富士太郎は三人を迎へり年来の艱難美亀の奇談をて安
 めひて感激し堪はず翌日富士太郎を將上洛し武將美満公へ仔細を
 訴ゆえ有り往り預りては樂譜の一卷を高峯の大鼓を獻てすて
 富士太郎は言を惜とて室町殿圍食く富士夫婦が説話を感
 ずるは是前より分りて本領安堵の御教書と賜るの事なり又
 下さるるの女は武道の古実を誦しけるを以て食ぬ孝を樂と武と
 ありて一國を冠くものなり今より三國富士太郎知一名告べし

命で別し越前三國の莊を加恩の便ち近従を召使りて定むるを誓
 かりその子信徳丸も孝順に父を敬らばて子孫長く繁昌せしむ
 富士太郎の宅地を洛中に賜るのち信徳尼をも以て厚く扶持
 又吉備の中山より故郷へ言傳せし舊僕を召出して録數多とらせ多
 田の灵廟へ奉詣憐る古き住吉二穗浅間十人三戸の神をも尊
 信し翌年應永二年より合法備衛の箇魔堂を修飾して堂の傍
 り地蔵并安置し有りて久々の菩提を昂ひぬこの復讐の事ハ
 僅に富士大鼓の以て謡曲の一章に記せし別し考據あり往昔ハ
 古もゆりんり

三國一夜物語卷之七 大尾



所弘賣

髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 羽二重結のいしは髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 洗ひの玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 自然の玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 用ひの玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 眞の美人とありありなり
 為永春水精劑

髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 羽二重結のいしは髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 洗ひの玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 自然の玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 用ひの玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 眞の美人とありありなり
 為永春水精劑

書物并繪入讀本所

江戸京橋跡左三門町東側中程
 文永堂大嶋屋傳右衛門

此の書物の髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 羽二重結のいしは髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 洗ひの玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 自然の玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 用ひの玉髪を洗ふと髪の色は白くなり二三日おひひらぬ髪は不荒癒の肌目由
 眞の美人とありありなり
 為永春水精劑

